知恩院阿弥陀堂考

平　祐　史

一　はじめに

梅原猛氏は「知恩院の二つの顔」と題して

法然上人の教えをくむ浄土念仏の徒は、専ら阿弥陀仏のみを崇拝すればよいと思われるが、どうしたわけか、ここでは阿弥陀仏より、祖師、法然上人の方が崇拝されている。

阿弥陀仏のいます阿弥陀堂は、御影堂の西にある。大きさは御影堂の四分の一にも足らず、この堂は、明治に再建されたものである。徳川の初期、同じように建てられたものであるが、明治には荒廃がひどく、修理は不可能になり、新しく再建されたものらしい。すでに徳川時代から、阿弥陀堂には御影堂のように手厚い保護が加えられなかったためであろう。あわれな阿弥陀仏よ。[1]

と評している。

梅原氏の指摘の通り、知恩院の阿弥陀堂の地位については、元より教義的にもいろいろの疑問のあったところではあったが、特に慣習の中に埋没している教団人においては、それがそのままある種の儀規に準じているがように受け

とり、何ら疑念を挾むこともなかったようである。今ここで改めて知恩院史を考えるとき、従来の慣習的先入観から離れて、卒直に検討を加える必要がある。こうした意味から阿弥陀堂に焦点をおき、若干の問題を提起したい。

さて、知恩院の伽藍配置は、東山を背景に土地の高低によって、上・中・下段の三段のグループに分けて考えられる。

先づ上段部分は、宗祖法然の晩年起居された大谷の禅房の旧蹟であり、且つ滅後、遺弟たちによって、営まれた法然の廟堂であって、中段の大殿の東方より石段で通じる山腹の崖地に廟堂・勢至堂・客殿・庫裡・山亭・位牌堂・鐘楼などが配置され、堂舎の北側は殆んど墓地になっており、門前の南側には捨世派一心院が密接して建ち並んでいる。

山を切り開いて造成したと考えられる、中段の台地には、大殿（御影堂）を中心に集会堂・大方丈・小方丈・唐門・権現堂・寺務所・古経堂（内対面所）・雪香殿・台所庫裡などが北寄りに位置し、西側には阿弥陀堂を中心として南に多宝塔、北に宝物収蔵庫等が東面して並び、東南側には経蔵・納骨堂・鐘楼が配置され、南側には茶堂・宝物殿（展示場）が設けられており、伽藍の主要部が、ここに集中的に形成されている。

下段部は、三門が伽藍正門として、西面南寄に所在し、同じ並びの北寄りに寺務所の出入門である黒門があり、黒門より白川東詰の古門までの東西に亘る道路の南北両側、それに三門より新門に至る道路の両側には、各々塔頭諸院をはじめ、信徒会館・学校等の教育・福祉の諸施設が並び建ち、市中の街並みへと連なっている。このような地形や伽藍の配置の景観をあらかじめ念頭において、境内の歴史的変遷にあわせて、特に阿弥陀堂の信仰上・伽藍上の地位及び、それをめぐる若干の問題について考察を加えてみたい。

二　慶長造営以前の知恩院の景観

慶長造営以前の知恩院は、上段部分の勢至堂・廟所を中心とする狭窄の地にあった。当時の寺観は、永正十四年

（一五一七）八月二十八日の回禄の後、第二十四代肇誉訓公が「再建勧進之状」を発して、再建につとめ、同年十二月に東福寺内万寿寺の堂宇を移築したと伝える梁行六間、桁七間の阿弥陀堂、ついで方丈・庫裡・総門等の諸堂舎、さらに第二十七世徳誉光然代に、享禄三年（一五三〇）青蓮院の護摩堂を移築して再建したと伝える御影堂（現勢至堂）などの堂舎よりなり立っていた。

この原知恩院の伽藍配置や景観は、知恩院に現存する宝永七年以前に作図されたと考えられる古地図をもとに想定してみると、ほぼ次のように復元できよう。

現在の勢至堂の前庭の位牌堂・鐘楼所在地一帯に、阿弥陀堂が東面して構えられ、堂宇の南側は殆んど土塀と接しており、阿弥陀堂の前庭は東崖がせまり狭窄であるため、土塀につづいて東寄に南面して総門が構えられていた。勢至堂の背後は、渡り廊下によって接続された方丈があり、さらに現在の墓地所在地には、四棟ばかりの庫裡や坊舎が設けられていた模様である。

永正十四年十二月に肇誉訓公代に建立された阿弥陀堂の仔細については、それを徴する史料を欠くが、『山州名跡志』巻二　愛宕郡東山大谷寺の項に

阿弥陀堂　在二同門内東向一、阿弥陀仏立像三尺余作不考、堂内敷瓦②、

とある。『山州名跡志』の成ったのは、元禄十五年三月であり、阿弥陀堂が中段部の堂舎群に組み込まれ、移築されたのが宝永八年であり、且つ『山州名跡志』の叙述の次第が、勢至堂・阿弥陀堂・紫雲水・法然上人塔の順に書きつがれているところから、阿弥陀堂の所在が、「在二同門内東向一」とあるのは、上段部の勢至堂所在境域の総門内を指すものと理解してよく、『山州名跡志』の編纂時には、阿弥陀堂は未だ上段部に属していたことを示している。

元来、この阿弥陀堂は、永正の訓公時代に東福寺内万寿寺の堂を移築したものと伝えていることから、阿弥陀堂の形式は、禅宗様であったと想像できる。特に、先の『山州名跡志』が伝えるように「堂内敷瓦」とある通り、従来の

浄土教系建築の形式である常行三昧堂様式の高床板敷ではなく、土間に瓦敷の法堂などの禅宗様の堂宇であったことを、この断片史料は語っている。

このようにして、慶長造営以前の知恩院の景観は、後奈良天皇宸翰と伝える『阿弥陀経跋文』に「爰知恩教院者海内名藍、門中本寺」[3]と謳われるように、また、永禄三年九月十五日付『足利義輝奉行人治部藤通・松田藤弘連署奉書』に

知恩院住持座次事、為浄土一宗之本寺条、不謂門徒宿老、上座之旨、先々被成　綸旨上者　被入聞食訖、宜被存知之由　所被仰下也　仍執達如件[4]

と定め、天正三年九月二十五日付、『正親町天皇綸旨』に

当院之事　為浄土一宗之本寺之旨、後柏原院宸翰等明白也[5]

と、一宗本寺たる旨を再々に及んで確認をえ、さらに織田信長・豊臣秀吉などの武家政権に接近することによって、寺領の安堵や加増をうけている。こうした一連の一宗本寺としての知恩院に対する処遇にもかかわらず、その有する寺域や寺観は必らずしも当時の洛中洛外の他宗大刹に及ぶべきものではなかったし、世辞にも「海内名藍」などと謳われる堂舎伽藍を備えていたとは考えられない。むしろこれらの所遇は、宗祖法然の廟堂たることに尊敬と所遇が寄せられたとみるべきであろう。

三　慶長・寛永の造営と阿弥陀堂

慶長七年（一六〇二）八月二十九日、徳川家康の生母、於大の方が伏見城で没したので、満誉尊照が導師となって葬式・中陰・法事などを執行した。家康は生母の菩提を弔うために、慶長八年二月征夷大将軍宣下とともに、中・下段部の大造成を行い寺域を拡張し、諸堂舎を建立することを命じた。

慶長八・九両年に本堂（御影堂）建立、十四・五両年には方丈等の諸堂、それに鎮守社を建立したと云う。しかし

元和二年（一六一六）に家康が没したが、知恩院大拡張という家康の構想は、秀忠に引き継がれ、翌三年亡父の菩提を弔うため三門・経蔵の造営を発願し、同五年（一六一九）にこれらの建築は成功するのである。ここに上段部の局限された狭窄なる旧知恩院の面目を一新し、まことに一宗本寺にふさわしい大伽藍結構を具えた知恩院の出現をみたのである。

云うまでもなく、中段部に展開された慶長・元和期の大知恩院構想は、やはり大殿（御影堂）を中心に据えて、諸堂を配置するという形式をとっている。つまり上段部建造物群の配置をできるだけ踏襲して、それを拡大化すると云うことである。成程その拡大化は、新御影堂は旧御影堂（現勢至堂）の約九倍に近い規模を誇り、方丈・庫裡等においても同様である。しかしこの大伽藍構想の中には、どうしてか阿弥陀堂の建築と、その拡大化が全く計画にないことである。

法然が一向専修念仏を提唱した根元の地であり、弥陀帰一仏を標榜する浄土一宗の本寺において、当然その計画を考慮しなければならない重要な建造物であるはずである。しかも上段部にある阿弥陀堂は、万寿寺の堂宇を移築した古建築であり、旧御影堂よりはるかに古い建造で、老朽化も進んでいたであろう。当然中段部建造に際して、それに相応する倍数の堂宇が構想されて然るべきであったであろう。

寛永十年（一六三三）一月九日、突然方丈より火を発し、木の香も未だ残る大方丈・小方丈・御影堂などの中段部の主要建造物は焼失する。塔頭良正院宗把の『炎焼覚書』[6]に、

一、方丈　大小二　　一、衆寮　二　　一、廊下　十四
一、庫裡　大小二　　一、衆会堂　　一、大御影堂
一、楼閣

此分致炎焼候事

右之外相残候分

一、古阿弥陀堂　一、勢至堂　一、勢至堂台所

一、経蔵　一、山門　一、霊宝蔵

一、雑蔵　一、黒門　一、総門

一総寺院中には何茂不害候、九日之夜周防様へ申上候節者　別而無正体故書付可致相違候、委者喜右衛門可申入候

正月十三日　良正院宗把　印

源察

九達

と記す通り、類焼を免れたのは、上段部の勢至堂、古阿弥陀堂、それに中段部は幾分離れた地にある経蔵や、下段の三門等である。ここで気付くのは、阿弥陀堂であって、記載には「古阿弥陀堂」とあり、上段部所在の堂を指すわけであるから、中段部に「新阿弥陀堂」があってしかるべきであるにかかわらず全く見当らない。もう少しうがった解釈をするならば、第三次造営の予定に阿弥陀堂が構想されていたのかも知れないが、その着手より先に、寛永の回禄に逢い、その構想も立ち消えになったとも考えられる。

寛永十年四月七日時の住持雄誉霊巌は、再建願いのために参府し、家光より旧観の如く再興すべき台命を受け、同年十二月七日起工、寛永十八年（一六四一）諸堂造営の成功を謝すために参府している。ここに現在の知恩院の壮大な姿が出現したのである。しかし、この寛永再興にあたっても、中段部にやはり阿弥陀堂の姿を見ることはなかった。前述の『山州名跡志』の編纂時、元禄十五年三月の当時には、やはり上段部に「古阿弥陀堂」のまま姿を残していたことは確かである。

四　阿弥陀堂の移築

阿弥陀堂の中段移築の顚末の記録として、知恩院に所蔵する『華頂阿弥陀堂丈六尊縁由』（以下『弥陀堂縁由』と略称する）がある。この書は、獅子谷法然院忍澂の弟子称阿澂運が知恩院住持麗誉順真の命を受けて、宝暦年中に筆録したものである。それによれば、

抑、当山の弥陀堂、最初ハ山上勢至堂の前にありしに、往時延宝中当寺三十八世玄誉万無上人冀望し給ひけりハ、此地にいます時ハ、登山の諸人拝膽にたよりよろしからす、山の半服御影堂のかたはらに引移しなは、可ならんとありしかと、時節熟せさりしにや成就し給わす、是によりて後代時いたりて再建のために黄金三百両遺嘱し給ふ。されとも時節いたらすにしより四代をふるに再建なかりき、然るに第四十三代応誉円理上人元禄中住職ましまし、宝永の末元祖大師五百年の忌辰に及ひ給ひぬれば、山内修補ありしに弥陀堂山上にありて、他国の諸人多くハこれを知らず。然れは諸人登山の砌り拝膽のためといひ前住万無上人宿願の事なれは、むなしく沈閣すへきにあらすと、すなはち遺金を以今の地に引移し給ひき。

とみられるように、阿弥陀堂の移築は、第三十八世玄誉万無の宿願であった。万無は、延宝二年（一六七四）五月に知恩院に晋董、延宝六年（一六七八）円山安養寺の持地を永代借地して、大鐘楼を建立、同七年三門前の祇園社領と門前袋町の知恩院領を交換して、三門前の道路（楼馬場）を通ぜしめるなど境内の整備に努めた。これらの工営事業は、同八年三月に厳修の善導大師千年忌法会を迎える準備の一環であった。こうした時期に阿弥陀堂移築を計画するのは十分首肯できることである。

また、万無は同九年洛東鹿ヶ谷に弟子忍澂と謀って法然院を開創し中興第一世となっている。『弥陀堂縁由』の著者が「洛東獅谷金毛老人門人称阿徴運」と識す通り、澂運は金毛老人即ち忍徴の弟子であり、玄誉万無の孫弟子に当

る。従って、阿弥陀堂移築の経過に、玄誉万無の事蹟を書き留めねばならぬ立場の人物であった。それだけにこの記録のもつ史料的意味は大である。

玄誉万無代には、阿弥陀堂移築は実現しなかったが、万無は、再建費として黄金三百両を遺嘱して、延宝九年（一六八一）五月に没した。

それから三十年後の宝永八年（一七一一）は、宗祖法然の五百年御忌に当り、第四十三世応誉円理の下に、その準備が進められ、特に先の玄誉万無の遺志を継いで阿弥陀堂移築の計画が進められた。知恩院所蔵『古記録抜萃』宝永六年の条によれば

一山上阿弥陀堂兼而来年引下し、御廟普請有之付、本堂之西森之内樹木を伐裁、地を広くし十一月ゟ十二月迄地築等

とあるように、阿弥陀堂の移築が本格的に取り組まれるようになったことを示している。場所としては、「本堂之西森内」を開き、宝永六年の十一月より十二月迄の一箇月間の整地造成期間を予定している。次いで、宝永七年の条には、

一阿弥陀堂曳キ建直、公儀向旧冬地願之時申済、又々同申上、三月済、上棟六月十五日、入仏閏八月二十五日

とあり、堂は新築でなく、「曳キ建直」であることに注目したい。文字通り旧建築物の移築である。工事は着々と進み、上棟は宝永七年（一七一〇）六月十五日、閏八月二十五日の宗祖の忌日に入仏式を挙げており、ここに初めて阿弥陀堂が中段部の建造物群の中に、姿を現わすことになったのである。

阿弥陀堂の規模については、

明治十二年四月博物館ヨリ当山諸堂米国人参観ノ為、由緒巨細訳致置旨依頼ニ付書出ス写

と付記のある『博物館江差出ス当山由緒略記』に、

阿弥陀堂一堂東西六間、南北七間、高四丈壱尺

とあり、『華頂由緒系図本記』の記載と同様である。従って、現阿弥陀堂の梁行八間、桁行九間の規模よりひと廻り小規模のものと考えてよい。

建築様式については、現在の堂宇が瓦葺の重層建築であるから、旧堂の様式をそのまま踏襲したかどうかについては不明であるが、安永九年（一七八〇）に出版された『都名所図会』の挿絵に見るかぎりでは、この阿弥陀堂は瓦葺単層に描かれており、幕末の冷泉為恭の描いた『華頂山大谷寺知恩教院全図』においては、「丈六堂」として、やはり瓦葺単層の様式である。内部の様式は、山上時代の古建築を移築したものであるから、永正年中訓公代の万寿寺移築時代の様式のままの「堂内敷瓦」であったか、どうかは詳らかでない。ただ高さ四丈一尺とあるから、約十二米余の高層となり、場合によっては重層建築ではなかったかとも推測できる。

次に建築資金面であるが、幸いにも宗祖五百年御忌をひかえ、宝永六年（一七〇九）九月、諸国門末に触書を発し報謝銭の上納を求めており、それに加えて先述の玄誉万無の遺金三百両が、これに充てられたものと思われる。

因みに、宝永度の五百年御忌報謝金の勧募状況について、知恩院蔵『諸国末派御報謝記』は、宝永七年四月より翌八年二月までの寄金として、銀高で二百二十三貫四百三十六匁二分九里で、金に換算すると、三千七百二十三両三歩十一匁二分九厘と記している。また知恩院の自己資金の出資状況は、銀高で十三貫二百匁、これを金に換算すると、二百二十両で、その内訳は、第四十二世白誉秀道の寄附金百両、宝永六年中の浄財金九十両、往古より有来る金三十両となっている。

さらに、万無の遺金は、銀高で十九貫二百四十三匁八分五厘、金に換えて、三百二十両二分十三匁八分五厘となっている。これの但し書に「右ハ集会寮為建立、万無和尚残し被差置候祠堂金此度出し払」とある。これらの寄金の合計は、銀高二百五十五貫八百八十匁一分四厘となり、金に換算すると、四千二百六十四両二歩十匁一分四厘となる。

つまり、五百年御忌の報謝寄金は一年足らずで四千二百六十四両の募財が行われたことを示している。

これに対する支出は、阿弥陀堂関係分としては、「引建立直し石垣等諸式入用」分に銀二十五貫九百五十六匁二分（金四百三十二両二歩六匁二分）と、「地形土持運築上ヶ候一式入用」分、つまり土地造成費として、銀二貫四百九十七匁五分（金四十一両二分二朱）の二項目を挙げ、この合計は、銀二十八貫四百五十三匁七分となり、金換算で四百七十三両二歩六匁四分二朱が阿弥陀堂移築工事に関する経費として計上している。

この時、阿弥陀堂の移築とあわせて、廟堂の修復工事が行われている。費目は「御廟堂修復幷拝堂新造諸普請方、石方地形山内平均諸式入用」とあって、経費は銀百四貫六百二十匁三分一厘（金千七百四十両三歩一厘）とある。この経費は阿弥陀堂工事費と批較すると実に三・七倍に当り、御廟堂修復工事を如何に重視していたかが思い合される。

今回の工営には、慶長・寛永両期の造営に見られたように、徳川氏の檀越としての全面的な財的援助は、殆んど無に均しかった様子である。その理由は、安政三年の覚書と推定される『知恩院御取立御趣意覚書』に、諸色の高直と本山経営の困難なることを幕府に訴え、善処を希望している。その末尾に次のように述べ歎願している。

一慶長度結構御取立、加之莫大之高禄御寄附之御内諚奉固辞候後も、厚御神恵御高恩之程重々難有奉荷恩、累世之守護職幷役者共申伝、御恩報として精誠御厄介筋不奉懸様、為冥加自力相尽、万端太切ニ御寺奉守護来候段、御明察被成下、慶長度永格ニ御規定被下置候御廉々厳有院様御代迄無御相違御取扱被成下内、御直命之住職御礼席、住職之節拝領物、翌年継目御礼出府之上、御尋之上使被下、同御賄米百俵被下、右之御事不軽儀、恐恵多端ニ奉存候得共、新規奉願候儀者無御座、既ニ御規定以後御四代様御代迄無御相違御取扱被成下候、御仕来之御廉ニ付、此儘ニ而者奉対御神恵江深重奉恐入候旨、前来守護職も不堪悲歎儀申伝候、何卒御取立之節、御規定被下置相続而御四代様御代迄御仕来通復古之御沙汰被下置候はゝ、御神恵被為輝、弥増御長久、御繁栄之御祈禱と幾久敷御仁恩之程難有可奉荷恩儀ニ付、二百五十有余年来、性根相砕抽丹誠来候、寺務柄御深察出格之厚御憐愍を以宜敷

被仰出候様、御慈評之程只管奉歎願候事⑦

この覚書は、幕末期の知恩院の財政事情の窮迫を物語るものであって、四代将軍家綱までは先格通り庇護を受けて来たが、それ以降は、そのようでないので、四代迄の仕来通り復古して欲しい旨を歎願している。

右の覚書は幕末の史料であるから、これをもって直ちに速断できないが、宝永七年の阿弥陀堂移築工事の時期は、六代将軍家宣に当り、前年の宝永六年正月には五代将軍綱吉が没している。周知の様に綱吉の時代は、元禄文化と呼ばれる一見華やかな一時期を築いたが、すでに幕府財政は窮乏の兆を見せはじめた時期であったから、当然、将軍家の知恩院に対する庇護は、先格通りでなく自から以前とは相違するものがあったであろう。こうしたことが阿弥陀堂移築工事において、将軍家の全面的な財政的援助を期待することが出来ず、諸国門末の報謝金と万無の遺金とによって建築費を賄う必要があったのであろう。同時にこの建造物は永正十四年訓公代に、万寿寺を移築したものと伝える建築である。それより算しても、すでに二百余年の歳月を経た古建造物であるから、当然、新築工事でなければならないはずであるにかかわらず、そのまま移築した理由も、実に将軍家の全面的庇護を得られなかったと推察してよいであろう。

五　阿弥陀堂本尊の変遷

玄誉万無の宿願であった阿弥陀堂は、上段部から中段部に姿を現わし、宝永七年閏八月二十五日入仏式を挙げた。明けて翌八年正月、宗祖五百年御忌が修せられ、宗祖法然に「東漸大師」と諡号せられ、華頂山の結構はいよいよ整えられるに至った。

さて、「登山の諸人拝膽にたより」よろしくなった阿弥陀堂の本尊については、前述の『弥陀堂縁由』に詳しい。

爾の時、粟田口義山和尚の介紹によりて、和州大安寺に伝来ありし御長四尺許の座像を請し、古来安置ありし五

尺有余の立像は御影堂の左東の壇上に安置し給ひぬと、古来の立像ハ春日仏師稽文会・稽主勲の彫刻にして、後光宝蓋宝座等ハ義山和尚の勧誘にて、西陣の川口平三郎在乃といへる者荘厳す。維時正徳二年四月十一日也と、

阿弥陀堂の本尊は、『弥陀堂縁由』にある通り、「古来安置ありし五尺有余の立像」「古来の立像ハ春日仏師稽文会・稽主勲の彫刻」と記し、また『翼賛』巻五十二の「阿弥陀堂」（山上時代）の項に「本尊立像五尺ノ弥陀ヲ安セラル、運慶カ所作也」と義山は証している。これら両者の記事は「五尺の立像」とするところは共通するが、作者が前者は稽文会・稽主勲で、後者は運慶としており、このあたりに記録の相違が見られるが、作者名は別として春日仏師の作品であることはまちがいない。

しかるに正徳二年（一七一二）四月、義山の紹介によって、大和国大安寺に伝来する四尺ばかりの座像を勧請して、中段移築の阿弥陀堂に安置し、古来の阿弥陀立像は、義山の勧誘で後光・宝蓋・宝座等を西陣の川口平三郎によって新たに荘厳し、「御影堂の左東の壇上に安置」したと伝えている。現在、御影堂東壇には、法然臨終の護持仏と伝える立像の阿弥陀仏が安置されており、『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）巻三十七に、

同日（建暦二年正月十一日）巳時に弟子等三尺の弥陀の像をむかへたてまつりて、病床のみきにたてまつりて[8]

と伝える如来像である。

そこで、『弥陀堂縁由』に伝える古本尊は、「五尺有余の立像」と云い、『翼賛』も「五尺ノ弥陀」としており、『四十八巻伝』の法然臨終仏は「三尺の弥陀の像」としているので、古来の本尊は、御影堂の東壇に安置されたが、これを以って法然の臨終仏とすることは出来ない。『翼賛』巻五十二、「御影堂」の項に、

東方ノ壇上ニハ弥陀ノ尊像ヲ安セラル、是寛印供奉恵心上足ノ真作ニテ上人臨終ノ御持尊ナリ[9]

と記しており、『翼賛』上梓時の元禄十六年十二月には、すでに御影堂に法然の臨終護持仏が安置されていたことを示している。

従って、阿弥陀堂の古本尊は、臨終護持仏ではなく、新たに御影堂の東方に、恐らく、臨終仏と並んで安置されたものと考えてよいだろう。

けれども、山上の阿弥陀堂時代より、本尊として安置されてきた、しかも法然浄土教の教旨をそのまま表象化する立像の来迎仏に替って、座像の阿弥陀像が勧請されたのは、どういう理由によるものであろうか。

こうして義山の紹介で勧請された弥陀像の本尊としての地位は、必らずしも永遠ではなかった。

それから五十年の歳月が経った。宝暦十一年（一七六一）は、宗祖の五百五十回遠忌に相当する。宝永度に移築された阿弥陀堂も何時しか「堂司これなきゆへ晨昏の供養なく三面の唐戸もひらかされは、諸人拝膽しかたし」という状態に立ち至っていた。宝暦十年麗誉順真は新たに弥陀丈六像の造立を発願し、来るべき遠忌の一大記念事業に資うとした。

折しもこの計画を伝聞した忍徴の弟子法然院知了及び徴運が、かつて忍徴が宝永年間に八幡南三昧堂の本尊であった仁門菩薩の彫刻と伝える、阿弥陀仏像の面輪を入手し、獅子谷の宝蔵に伝存していた。この面輪に体軀を加刻し本尊にすることを薦めたのであった。

忍徴が八幡南三昧堂の本尊の面輪を入手した経緯については、『弥陀堂縁由』に次のように語っているので、多少引用が長文に亘るが参考のため紹介しておこう。

中古西大寺の興正菩薩、雄徳山にいませし時、八幡大菩薩の霊告によりて本地堂二所建立あり、其一は山上の西三昧堂是なり、其二ハ山趾にある所の南三昧堂是なり、此二所に安奉せる弥陀丈六の尊像、同しく八幡宮の神刻なり、又男山太子谷に太子堂あり、此堂内に安置せる丈六の地蔵尊もともに太神の神刻なり、然に中古天災ありて、南三昧堂の本尊及ひかけ地の地蔵尊両所の尊軀ともに失給ひなく、面輪のミ遺れり、一時先師（忍徴）八幡にまうてゝ昌玉庵（昌玉庵ハ南三昧堂の境内に在り獅子谷法然院の末庵なり）に信宿ありしに八幡の当職新善法寺晃清僧正旧識たりし故、様望あ

りて雑談の砌両所両尊の興廃に及ひぬ、時に先師南三昧堂建立の志願を述られたるに、僧正甚た随喜あり、わけて太子堂地蔵尊加刻の叉懇望ありしに、先師速に領掌ありて、京師に帰り、有信の道俗を勧誘し数月ならさるに成就し、南三昧堂に安奉し、次て神原氏をして薩埵の二脇士及ひ八尺の四天王の像を彫刻し寄附あらしむ、爾後先師八幡に登山ありしを、晃清僧正伝へ聞歓喜踊躍して昌玉庵に来臨し、寒喧万福を叙し畢ていはく、今度南三昧堂再建且地蔵尊の加刻、剰へ左右の脇士四大天王寄附の事、謝するにことはなく、酬るにものなし、されは当三昧堂の本尊も天災の後たた面輪のミ宝蔵中に納め置ぬ、これまた地蔵尊のことく当所ハ僻地にて有信の者希なれは、たとひ幾箇の歳月をふるとも成就する事あたハす、幸に地蔵尊は師の精力を煩して、古に復しこれにすきたる幸ひあるへからす、又当三昧堂の本尊も同しく八幡宮の神刻にて世に稀なる尊容なり、然ともこれまた当今只面輪のミ在せり、今回報謝のために贈寄す。願はくハ好時節を得て加刻し念持し給へと、老師もおもひよらざりし事なれと、其志を感しすなはち拝受して京にかへり獅子谷の蔵中に安奉し、よって勧誘ありしかと時機いたりさる故にや加刻成就せさりき、

とあるように、忍徴が後年、知恩院弥陀堂本尊となるべき丈六尊像の面輪を得る機会を得たのは、八幡南三昧堂の復興と地蔵尊像の体軀の加刻に積極的な援助をしたことに対する報謝の寄贈であった。

こうした経緯を経て、半世紀後忍徴の弟子知了・徴運が知恩院麗誉順真に丈六像造立の機縁を結ばしめることになるのである。その事情について『弥陀堂縁由』は、

然るに近者、華頂麗誉大僧正弥陀丈六の尊像造立の御願望ありと伝へきゝて、私におもへらく、先師所願のことく加刻し奉り、南三昧堂に安奉すとも偏僻の地なれは、膽仰結縁のもの多かるへし、又昌玉庵の住侶すくれたれは、非常の守り恐(逼カ)通すくなからす、又都東山華頂に安置せは登山の諸人拝膽して利益廣轉ならん、又諸人拝膽のよろしかれは、伝へきけるもの競進みて造費を喜捨し、尊像速に成就し給ハん、然れは諸人に功徳を貯へしむる

の利益もまたすくれかたし、是等の利益一方ならねは、いたつらに蔵中に峰閣せんより華頂へ寄進し奉らんにハしかし、若尊像成就し給ハハ従来弥陀堂に安置ありし尊像を、男山の南三昧堂に移し奉るときは、双方の所願日時に満足し、先師金毛老人の所懐もむなしからしと、法然現住知了上人とともに、こころをあはせて、華頂山主人啓白せしに、山主大僧正歓喜すくなからす、即時両執事八院及ひ山内大衆へ語け給へは、時節到来にや、各一同に首肯随喜ありき、

と語っている。かくて、獅子谷忍徴所伝の尊像の面輪にいよいよ体軀を加刻することになったのである。

その資金として、大谷氏為空隠士の先妣の遺金五十両が寄せられ、また当住麗誉順真の法弟で伏見西光寺前住剛誉信厳の追善のため、その遺財を投捨し、その余は、住持自から補援すると云うことで、体軀の加刻修復を仏師田中康教に命じた。

『五百五十年御忌勝手向日鑑』宝暦十年六月五日の条に

一本尊丈六仏新調、堀川仏光寺下ル仏師田中康教へ被仰付、古本尊ハ集会堂へ移候事

とみられるように、いよいよ丈六仏の体軀加刻が行われたことを示し、かつて義山将来の古本尊は集会堂へ遷座されることになった。そして、同年七月朔日には

一坂本や惣兵衛江弥陀堂須弥取懸り候様申付ル

とある通り、新丈六仏安置用の須弥壇が阿弥陀堂に取り付けるよう準備が進められた。

かくて、九月朔日には、

一弥陀堂本尊出来ニ付、於集会堂上段、箔置今ゟ仕候事

と、新調の丈六仏が完成し、集会堂に搬入され、箔を置く作業にとりかかったことを示している。

一方、阿弥陀堂から集会堂へ遷座された旧本尊は、『勝手向日鑑』十月六日の条に、

一弥陀堂古本尊八幡辺へ御入堂之由　仏師康教より取ニ来ニ付相渡ス

とある。ここに云う「八幡辺へ御入堂之由」とは、

若尊像成就し給ハ、従来弥陀堂に安置ありし尊像を男山の南三昧堂に移し奉るときは、双方の所願日時に満足し、先師金毛老人の所懐もむなしからし

と、『弥陀堂縁由』は、その理由を述べている。つまり忍徴の男山南三昧堂本尊の復興の遺志を、この機に旧本尊を男山南三昧堂に遷座することによって、成就しようとしたのである。また、

時に山主宣はく、（中略）さあれは八幡宮は当山の鎮守なり、彼山ハ大安寺行教法師、太神の神告によりて、開き給へる宮居なれは、本地の尊像たかひに移りかはらせ給ふも又因縁なきにあらすと仰ありき、

と、知恩院の鎮守八幡宮は、男山八幡宮を本地とするから、本地の尊像が互に移り替るのも因縁であると述べ、丈六仏勧請の必然性を語らうとしている。阿弥陀堂に新本尊として、弥陀丈六仏が調えられるに従って、京都・大坂の有縁の緇素の喜捨もあり、新たに拝席に長床が設けられ大衆とともに供養できるように配慮された。かくて『勝手向日鑑』宝暦十年十二月二十三日の条に

一明廿四日御斎後、大師御身拭、并正遷座八ツ時ミた堂本尊入仏供養

と記す如く、十二月二十四日御影堂宗祖像の御身拭式の当日、午後より丈六仏の遷座法要が行われることになった。ここに現本尊丈六の阿弥陀仏座像が阿弥陀堂に安置されるに至ったのである。

新たな丈六仏の入仏をみた弥陀堂には、山内鎮護のためにと、新たに麗誉順真大僧正と等身の地蔵菩薩像を造立して、堂内左の壇上に安置し、右壇には、弥陀堂建立の元本功徳主たる玄誉万無の真影と、阿弥陀堂移築再興者で、且つ大僧正任官の中興応誉円理の肖像をそれぞれ安置し、さらに四天王像を須弥壇のかたわらから、衆徒の進退に都合の良いようにと、堂内の四隅に安置し、さらに宝蓋の造費五十金を投じて、五条の仏工植村宗而に造らすなど、堂内

の荘厳を具備した。

かくて、従来弥陀堂は、堂司もなく晨昏の供養もなく、その上三面の唐戸も閉ざされたままで、諸人の参拝もままならぬ状態であったのに対して、当住麗誉順真は、堂司を置き、自から白銀三貫目を永代香華料とし、ここに阿弥陀堂の荘厳及び管理を整えるとともに、信仰的機能の回復に務め、宗祖五百五十年御忌を厳修したのであった。

六　むすび

明治十一年十月阿弥陀堂は腐朽甚だしく存立に堪えざるということで取毀わされ、永正十四年十二月東福寺境内万寿寺の堂宇を山上の廟堂の下に移築して以来、実に三百六十年の風雪を刻んだ歴史を閉じた。万寿寺の前史を算すれば更に古い建造物であった。

こうした年輪を刻んだ堂宇にもかかわらず、少なくとも徳川時代の阿弥陀堂は、御影堂や廟堂と対照的に無視された堂であった。そのことは、知恩院の草創と深くかかわる問題であって、弥陀一仏信仰に立つべき寺か、祖師の遺跡で祖師信仰の場であるべきかという問題に帰す。云うまでもなく、後者祖師信仰に力点がおかれた寺である。それは宗祖滅後の京畿在住の門弟、特に知恩院の草創にかかわった勢観房源智やその同法者らは、宗祖法然を追慕する知恩報恩の念が強く、「宗」や「教」に先行するところに知恩院草創の本質があるとみてよいだろう。『知恩講私記』にもられる祖徳讃歎の思想や、近年発見の近江信楽玉桂寺阿弥陀如来像胎内文書の建暦二年十二月二十四日の記年のある源智の願文は、まさしくそれを裏づけるものであろう。こうした常随給仕の門弟たちの変わらぬ宗祖への追慕から生ずる知恩思想に基づく祖師信仰は、膝下の京畿門弟の間に深く根づくのは当然であって、他の在洛浄土宗本山もまた御影堂中心の伽藍を形成するのである。ここに京畿の浄土宗と、教義信仰を重視する関東浄土宗との間に本質的相違があると云ってよいであろう。

註

① 『古寺巡礼　京都⑲「知恩院」』淡交社刊　七〇頁
② 大日本地誌大系本『山州名跡志』第一巻九頁下
③ 水野恭一郎・中井真孝編『京都浄土宗寺院文書』四頁下
④ 水野・中井編前掲書　一〇頁下
⑤ 水野・中井編前掲書　一一頁下
⑥ 『知恩院史』七一頁―七二頁
⑦ 『大日本仏教全書』史伝部　三巻二〇九頁
⑧ 『浄土宗全書』十六巻五五七頁
⑨ 『浄土宗全書』十六巻七九三頁